

遺志を受け継ぐということ

棚倉中学校 1年

須田 大健（すだ ひろたけ）



五か月前僕の祖父が亡くなりました。突然の出来事だったので僕は信じるできませんでした。祖父が亡くなったのは、僕がいつものように友達と遊んでいた頃でした。家に帰ると、父が悲しげな表情で、「おじいさんが亡くなったんだ。」と言いました。僕は祖父の最期を知らずに、そばに居ることができなかったことが悔しく、また悲しくて、目から涙があふれてきました。祖父が亡くなったことは、僕にとっても、母にとっても大きなことでした。いや、家族全員にとってもです。

祖父が亡くなったその日のうちに、親せきや祖父の友人たちが集まりました。その中には、僕が知らない人達も多勢いました。そして、だれもが、同じ表情で集まっていました。僕は、祖父が突然亡くなくても、自分の都合に関係なく、多勢の人たちが祖父の家に集まったことがすごいと思いました。やはり、誰もが悲しみや、祖父への感謝の気持ちがあったからなのだと僕は思いました。

祖父は、農作業中に、頭を打ってしまったために、脳の病にかかってしまったのです。その祖父の変化に母が気付いたのは、去年の十月頃でした。その話を聞いたとき、僕は「そんな…」と、とても信じられず言葉も出ませんでした。なぜなら、いつも元気に農業の仕事をし、山へもよく行っていたからです。また、自分の身近な家族であり、いつも笑顔だったからです。僕は、祖父の表情を今でもはっきりと覚えています。

数多い祖父との思い出の中でも印象深いものが二つあります。

一つは昆虫についてです。祖父は、夏になると必ずと言っていいくらい「かぶと虫」を捕ってきてくれました。そのお蔭で、僕は昆虫にふれる機会を多く持つことができました。かぶと虫だけでなく、他にも数多くの昆虫を捕ってきてくれました。祖父はいつも、「大健、また捕ってきたぞ。」と言って満面の笑みを浮かべながら僕にくれました。いつも、きっと僕の喜ぶ顔を楽しみに昆虫を捕ってきてくれたのでしょう。このお蔭か、今でも道端で珍しい虫を見ると、僕はすぐその虫を手にとって調べてみたくなります。

もう一つは、「しいたけの駒打ち」です。しいたけの駒打ちとは、しいたけの栽培用に切った原木に、専用のドリルで数か所の穴をあけ、そこに「種駒」といった木片にしいたけ菌を繁殖させたものをうめこむ作業のことです。僕がまだ小さい頃にその方法を教えてもらいました。祖父は、慣れた手つきで作業をしながら、ていねいに教えてくれました。難しいと思いつつもやり遂げると必ず褒めてくれました。僕は人の役に立てることが、とても素晴らしいことなのだと、実感しました。それが今の僕の自信にもつながっています。

祖父からは数多くのことを教わりました。人は自分が学んだことや、得た知識をやがて次の世代の人に伝えていく。それがくり返されて今の僕の代に至るのと考えます。僕も大人になったら、それらを次の世代に伝えていきたいと思います。僕は、自分という存在の大きさについても改めて考えることができました。

僕は、祖父の骨を見たときに、とても驚きました。祖父の身体のひとつが灰になっていたのですが、がっしりとした足と腰の骨がそのまま残っていたのです。まるで祖父の長年の農業に対する努力と、不屈の精神を物語っているようでした。僕もその血を受け継いでいると思うと、なんだか力が湧いてくるような感じがしてきます。僕の、何事にも努力するという精神もここからきているのかもしれない。

人が亡くなるということは、この世からいなくなるということです。しかし、その人の遺志や精神は残された誰かが受け継ぎます。僕も祖父の遺志や精神、祖父から教わったことをいずれ伝えていかなければなりません。そのために、自分もその一人としての使命を抱いてこれからは生きていきたいです。

「おじいちゃん、今までありがとう。僕もおじいちゃんのように信念を曲げず、何事も努力して頑張るから、見守っててね。」